



TITLE:

# 印刷されたスンダの叙事詩ワワチャ ン

AUTHOR(S):

森山, 幹弘

---

CITATION:

森山, 幹弘. 印刷されたスンダの叙事詩ワワチャ. 東南アジア研究  
1990, 28(1): 108-122

ISSUE DATE:

1990-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56395>

RIGHT:

## 印刷されたスンダの叙事詩ワワチャン\*

森 山 幹 弘\*\*

### The Sundanese Epic *Wawacan* in Print\*

MORIYAMA, Mikihiro\*\*

The literary form known as *wawacan*, an epic written in the Sundanese language in the *dangding* form of regulated poetry, appeared in West Java from the 19th century to the middle of the 20th century. Formerly transcribed in manuscript and passed from hand to hand, the *wawacan* began to be printed, together with Sundanese prose, from about the middle of the 19th century. This paper tries to trace the position that the printed *wawacan* occupied in the Sundanese literary stream for nearly one hundred years since the first Sundanese story, *Tjaritana Ibrahim*, was printed in 1853, mainly on the basis of the collection of the Koninklijk

Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde in Leiden.

Statistical observation of the *wawacan* and a survey of popular titles has shown this to be the distinctive literary form from the 19th century to the middle of the 20th century. On the other hand, the government enterprise Landsdrukkerij in the 19th century and the government publisher Balai Poestaka in the 20th century played important roles in the printing and publishing of Sundanese books in Batavia. When observed through the *wawacan*, Sundanese literature can be said to have been officially produced and *jinak* (tamed) in this period.

### は じ め に

西ジャワに住むスンダ人の母語であるスンダ語によって書かれたものの中に、定型詩を

用いたワワチャン (*wawacan*) と呼ばれる文学フォームがある。このフォームはジャワから伝わったもので、主に文芸を書き表すために用いられたものであったが、次第に非文芸のものにまで使われるようになり一つの時代を代表する文学フォームとなった。その時代とはスンダ語の印刷物が世に出始める19世紀の半ばから20世紀の半ばである。一方ワワチャンは印刷物においてだけでなく、18世紀頃以降の手で書き写された多くのマニュスクリプトの中にも見ることができる。むしろワワチャンの点数はマニュスクリプトの方が多いと言える。

本稿では、スンダ文学の流れの中でワワチャンがいかなる地位を占めていたのか、ワ

\* 本稿は1988年9月から翌年6月までの10ヵ月間、オランダ政府の奨学金によるレイデン大学での研究を元に稿をまとめたものである。また本稿は、上記の期間における筆者に対するレイデン大学文学部インドネシア学科のヘンク・マイヤー教授 (Prof. Dr. H. M. J. Maier) の文字通りラヒール・バティン (lahir batin) の指導に負うところが大きい。

\*\* 3—36—305, Meitohondori, Meito-ku, Nagoya, Aichi 465, Japan

ワチャンを取り巻く文学空間はどのようなものであったのかという問題関心をもって、ワワチャンを軸にしてレイデンの王立言語地理民族学研究所 (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde: 以下 KITLV と略す) の蔵書を基に資料整理を行うものである。ここで扱う時期は、1853年のスンダ語の最初の印刷物である『チャリタナ・イブラヒム』(*Tjaritana Ibrahim*) が現れた以降のおよそ100年間である。

## I ワワチャンについて

wawacan の語は、wa+waca+an と分解でき、語根の waca は「朗唱する」“recite”の意で、語頭に語根の wa を繰り返し接尾辞の an は名詞を形成する。

ワワチャンは、17世紀の半ば頃スンダ地方がジャワのマタラム王国に支配を受けたときにジャワからスンダに持ち込まれたと言われているが、ジャワのモチョパットと同じように17種類の定型詩 (ププ pupuh) によって書かれる物語である [森山 1987]。その17種のププを使って書かれたものは、スンダ人の間ではダンディン (dangding) と呼ばれ、その内容が物語性を持っているものをワワチャン、いないものをググリタン (guguritan) と呼んで区別されることもある。ププはそれぞれ行数、押韻が定められ、内容がそれに従って書き分けられる。例えば、アスマランダナ (asmarandana) と呼ばれるププは7行で、各行が8音節、i-a-e/o-a-a-u-a と韻を踏み、愛を表すときに用いられる。さらにそれぞれのププは、それぞれのメロディーに従い歌われる。

ワワチャンは自由リズムで歌われ、その音楽ジャンルはトゥンバン (tembang) [Satjadibrata 1931; van Zanten 1987] と呼ばれる。トゥンバンはダンディンと共にジャワ

から入ってきたもので、貴族達の間で発達した。19世紀の貴族達は代々世襲される称号を持ち、多くの者は役人となって各地方の政治の中心地であったカブパテン (kabupaten 原住民首長ブパティ bupati の座す所) 周辺に住み、独自の文化空間を形成していたようである。一方スンダには、このトゥンバンの他に固定リズムの歌で、カウィ (kawih) に代表される音楽ジャンルがトゥンバンが入ってくる以前から存在し、一般に一行が8音節からなる韻文のパントゥン (pantun), キドゥン (kidung), シャイール (syair) などの文学フォームと結びついて広く庶民の間で発達してきた。

ワワチャンの発達について見ると、それはマタラム王国時代にスンダ社会に入ってきた。残されているマニュスクリプトから推測すると、それが流行ったのは19世紀になってからのようである。そして、その浸透は、当初貴族たちの嗜みであったトゥンバンが庶民の間にも広がった結果であったと考えられる。トゥンバンは主として、大小の二つの箏カチャピ (kacapi) と縦笛スリン (suling) の伴奏で優雅に歌われるものであるが、それとは全く別のパフォーマンスであるブルック (beluk)<sup>1)</sup> とよばれるコーラスの形態が農民の間に広がり、そのためにもテキストとして

1) ブルックは一人の読み手がワワチャンの本を前にして、物語を定型詩に従い一行ずつ読み上げ、それを円座に座った男性たちが一人ずつ引き取って、それぞれの定型詩ププに合わせてメロディーを付けて歌い回す。そのため、文字が読めなくてもメロディーさえ覚えていれば誰でもブルックに参加できる。また時には、一定の区切りで読み手の合図に従い一同が声を合わせて歌ったり、掛け声や合いの手なども興に任せて入れてもよい。現在では、ある地域でこの芸能がまだ行われるという噂はあるが、ほとんど消滅してしまったと言われている。

ワワチャンの需要が増えたのではないかと考えられる。人々は町では娯楽や嗜みとしてトゥンパンを、一方村では割礼、結婚、出産、米の収穫などの行事に際して儀礼や娯楽としてブルックを夜を明かして楽しんだようである。

先に述べたように、ワワチャンはマニュスクリプト<sup>2)</sup>のものと印刷されたものとがある。マニュスクリプトは、最初に書かれた年代、書き写された年代ともに明らかではないが、多くのものは19世紀のものであると考えられる。同じ物語が、幾つものマニュスクリプトとして書き写されているため実際にはどのくらいの点数が存在するのか明らかではなく、また今もスンダ社会に広く散らばっているため全体像は掴みにくい。一方印刷されたワワチャンは、スンダ語の最初の印刷物である『チャリタナ・イブラヒム』が出版された6年後の1859年に出版された『イウ・ワワチャン・チャリタ・イブラヒム』(*Ijeu wawatjan tjarita Ibrahim*)を初めとして、以後およそ20世紀の中ごろまで印刷、出版される。次に、その印刷されたワワチャンを巡るスンダ語の出版状況についてみることにする。

## II スンダ語の出版物

1853年の最初のスンダ語の出版物の発行以降の概観を掴むために、下にレイデンのKITLVのカatalog<sup>3)</sup>をもとに年毎の出版物

の推移を図に示す(図1)。このカタログは、「蘭領東インド」の大分類の中に「文法と会話」、「スンダ語テキスト」の項を設けているので、スンダ語の出版物を拾い出し全体像を掴むのに便利である。そして各テキストについて出版社、印刷所、出版年、著者等を確認し、ひとまず1945年までの図を作った。またここで数えた出版件数には、改訂版、再版も含まれている。

図1の出版物の総数は365点である。そのうち学校教材(62点)を除いた303点のものを文学フォームについて見ると、およそ三分の一のものが定型詩プブを使ったワワチャン(110点)であることがわかる。

この図を見ると、1860年代のワワチャンを主とする出版のピークと1910年から1930年の初め頃までの全体的な出版のピークとがある。前者のピークは、全て印刷公社ランズドゥルクレイ(Landsdrukkerij)<sup>4)</sup>によって印刷、出版された時期であり、一方後者はバライ・プスタカ(Balai Poestaka)を中心にして出版された「民衆教化委員会」(Commissie voor de Volkslectuur)のシリーズと共に全蘭領東インド規模で出版がオランダ植民地政庁によって促進された時期であった。

次に近年報告書の形で作成された『西ジャワ州文献』[Ekadjati and Hardjasaputra 1987]の中のスンダ語の出版物を拾い、上のKITLVのカatalogを元にした図とを合わせて当時のスンダ語の出版物の全体像を補うために作成したのが図2である。この報告書

2) ワワチャンを含むスンダのマニュスクリプトについては、Ekadjati [1988], Juynboll [1899; 1912], Kern [1983], Ricklefs and Voorhoeve [1977], 森山 [1987] を参照。

3) KITLVの蔵書カタログのうち1945年頃までの出版物を掲載している第5版の補遺 Rouffaer and Muller [1908; 1915; 1927; 1937; 1966; 1972] までを使った。

4) 1806年に旧社名 Kasteels-drukker を Landsdrukkerij と改めた。1930年頃まで目覚ましい印刷活動を行っていたが、1931年から印刷量が減少し始める。特に設立の経緯については、Departement van Gouvernements-bedrijven in Nederlandsch-Indië [1912: 7-14] を参照。

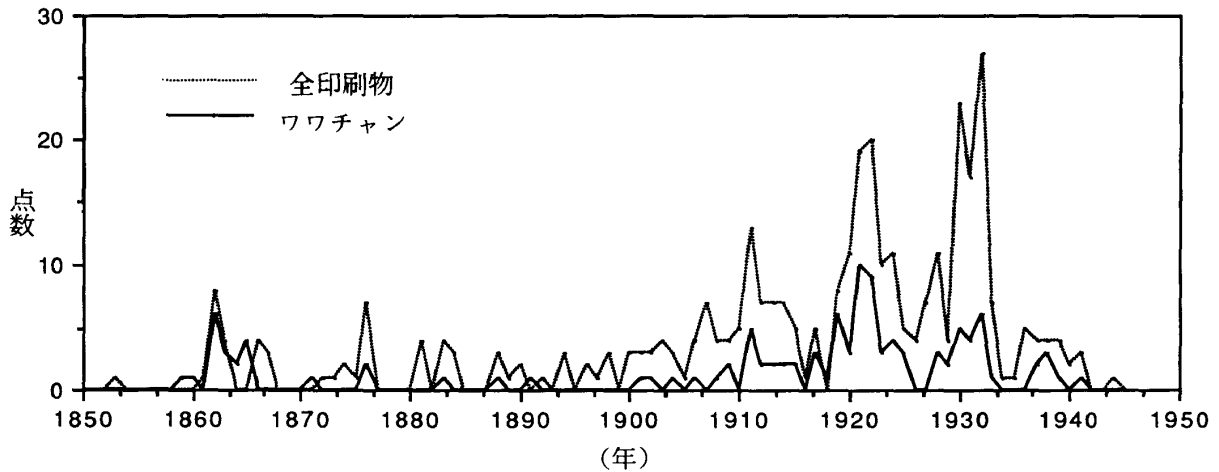


図1 KITLV所蔵 スンダ語の印刷物

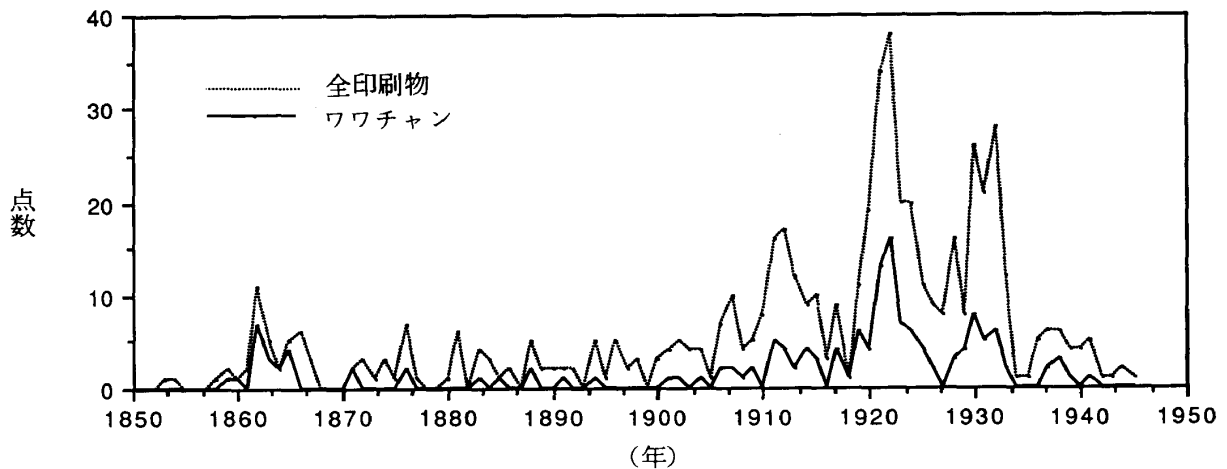


図2 スンダ語の印刷物

は、ソースとして8種類のカatalogを元に行っているため、掲載点数も多く当時の出版状況を表しており、その点で評価しうるものである。<sup>5)</sup> しかし重複や見落とし、記載の不統一が多いことに注意を払わねばならない。

図2を総計すると、スンダ語の出版物は

1853年から1945年まで557点を数えることができる。そのうちワワチャン<sup>6)</sup>は153点で、全体の27.5%を占めている。また物語性を持つもの407点の中では、ワワチャンは37.5%を占めている。さらに19世紀に限ってその出版状況を見てみると、ワワチャンは全

5) たとえば、Balai Pustaka [1948] を基に1911年から1941年までのバライ・プスタカの出版物に限ったものを図にして比較すると、およそ図2と同じ像を描く。

6) Ekadjati and Hardjasaputra [1987] の文献目録の中で、タイトルにワワチャンを冠したものだけを数えたため、実際にはこの数字より多くなるはずである。

出版物の 26.2% を占めており、印刷された出版物の中でワワチャンという文学フォームがスンダ社会で重要な位置を占めていたことが推測される。そのことは、20世紀半ばまでのスンダの文学を考える場合にマニュスクリプトの中だけでなく印刷物の中でもワワチャンは見逃されてはならない文学フォームであったことを示している。

比較のためにマニュスクリプトにおけるワワチャンを同様に数字で見してみる。スンダのマニュスクリプト<sup>7)</sup>として分類されているものは 1,831 点あって、そのうちスンダ語で書かれたワワチャン、もしくはタイトルからワワチャンと考えられるものは 552 点<sup>8)</sup>で、全マニュスクリプトの 30.1% ということになる。

### Ⅲ スンダ語の定期刊行物

上に見たようにワワチャンがスンダの社会で流行したフォームであったとすると、同時代の定期刊行物においてもこのフォームが好まれて使われたのではなかったかと考えられる。ここで一口に定期刊行物と言っても、その発行頻度にはかなりのバリエーションが見られる。例えば *Soendaneesche Almanak* と *Soendaneesche Volksalmanak*<sup>9)</sup> は 1 年に 1

回しか発行されなかった。また新聞 (*surat kabar*) と名づけ、週刊であったり隔週刊であったりするものが 6 誌 (*Padjadjaran, Al Moe'min, Benteng Ra'jat, Passar Dagang, Taufieq, Sinar Karawan*) ある。一方、*Sipatahoenan, Timbangan, Priangan* の 3 紙は日刊であった。1945 年頃までの定期刊行物の出版状況を図 3<sup>10)</sup> に示す。

この図を見ると 1920 年から 1930 年までが出版のピークで、1930 年代の後半を除いて図 2 のスンダ語の印刷物の出版のピークと一致する。特に 1932 年は 10 点の定期刊行物が発行されているが、これは図 1 の最高出版数とピタリと合致する。ただワワチャンの出版数の頂点はもう少し早く現れていて、1922 年に見ることができる。

これら 38 点の定期刊行物のうち 4 点 (*Soendaneesche Almanak, Soendaneesche Volksalmanak, Poesaka Soenda, Parahiangan*) だけがレイデンにあり、その他のものはジャカルタに所蔵されている。その 4 点の定期刊行物に限って見ると、*Soendaneesche Almanak* だけが民間の出版社によるもので、1892 年から 1897 年までチレボン (Tjirebon, Cheribon) の A. Bisschop 社によってジャ

7) スンダ語で書かれたものだけでなく、ジャワ語、ジャワ-チレボン語、アラビア語、マレー語、オランダ語のものもスンダのマニュスクリプトとして Ekadjati [1988] に載せられている。

8) 所在地別の内訳を見ると以下のとおりである。  
インドネシア国内 (Museum Nasional di Jakarta, Museum Cigugur di Kuningan, Museum Pangeran Geusan Ulun di Sumedang, Museum Negeri Jawa Barat di Bandung) 129 点  
西ジャワ州内の個人所有のもの 297 点  
レイデン大学図書館東洋マニュスクリプト室 126 点

9) 1919 年のものは印刷、出版ともに Landsdrukkerij、1920 年のものは印刷が Landsdrukkerij、出版が Bale Poestaka となっているが、1921 年から 1927 年までは印刷が Drukkerij Volkslectuur (Kantor tjitak Bale Poestaka)、出版が Bale Poestaka に変わり、さらに 1928 年から 1940 年までは印刷、出版ともに Balai Poestaka となっていることはバライ・プスタカの発展の様子を良く表わしている。

10) この図はレイデン大学の研究助手であるファン・デン・ベルフ (van den Berge, T.) が、レイデン大学周辺とジャカルタ中央図書館の定期刊行物カタログを調べて作成した表に基づいている。

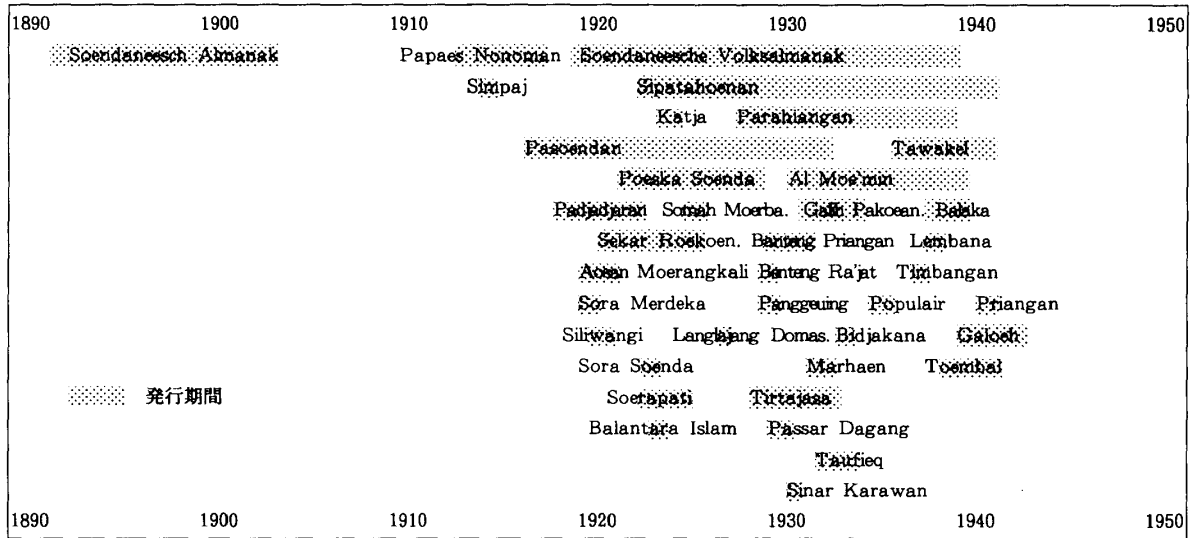


図3 スンダ語の定期刊行物

ワ文字で出版され、1897年半ばから1903年まではスマラン（Semarang）の G. C. T. van Dorp & Co. 社によってジャワ文字及びアラビア文字で出版されている。そのほかの3点の定期刊行物はいずれもオランダ植民地政庁が関与した機関によってラテン文字で出版されている。

これら4点の定期刊行物に掲載されたものを、文学フォーム別に見ると、ほとんどの定期刊行物にワワチャンが掲載され、またワワチャンでなくても定型詩プブを用いて書かれたものが時代を遡るほど多いことがわかる。特に初期の *Soendaneesche Almanak* の誌上では物語性をもつもののほとんどがプブのフォームを用いて書かれており、その時代の文学フォームの特徴をよく表している。一方、1920年代以降の定期刊行物に掲載された文学はプブを用いた韻文と散文が入り混じるようになる。

さてここでもう一度、上に述べたいいくつかの点を踏まえて図3を見てみる。唯一19世紀に発行された *Soendaneesche Almanak* の誌上には、一年に一回の発行であったにもかかわらず、一般に定期刊行物がそうであるよう

に連載ものも見られる。しかし、1920年以降に発行された日刊紙や週刊誌の読まれ方とは違って、むしろそれは単行本として読まれていたのではないか。定期刊行物は概して読み捨てられるものであるが、*Soendaneesche Almanak* は幾度も手に取られ、あるいは先述したようなスンダの芸能と結びつき、朗唱され大勢の人に聴かれたのではなかったか。それ故に、書かれた文学フォームは詠じ易いプブが多かったのである。やがて1920年頃になると、誌上に現れる文学フォームも散文のものが増え、発行頻度も高くなるに従い、定期刊行物の読まれ方も変化したと考えられる。そのことは、新しい教育制度や教科書の浸透、普及とともに増えた読者の出現とも係わっている。

#### IV 印刷所と出版社

スンダ語の本の出版は先にも述べたとおり1853年に始まる。1945年までの約100年間を見るとバライ・プスタカがもっとも多くの本を出版しているが、1917年にバライ・プスタカが設立され、1921年に独自の印刷所を持つ

までの期間においては、ほとんどの本はオランダ植民地政庁によって直轄されていた印刷公社、ランスドゥルクレイによって印刷及び出版されていた。

さらに詳しく見ると、1853年以降のKITLVの蔵書を調べた限りにおいて、1911年までの間、全てのものはランスドゥルクレイによって印刷され、1908年に「原住民学校教材及び庶民の読物のための委員会」(Commissie voor de Inlandsche school- en Volkslectuur) が設置される以前は、同じく出版も行われていた。民間の出版社や印刷所によるものはそれまでの間全く見当たらない。しかし1908年以降は同委員会が原稿をチェックし、ランスドゥルクレイだけでなく民間の印刷所へも印刷を発注、あるいはすでに印刷されたものを買い上げ、出版は同委員会の名の下に行うという制度に変わった[Balai Pustaka 1948: 5-14]。発注を受けた印刷所は、ほとんどがバタヴィア(Batavia)にあった。それらのうち、スンダ語のものを扱ったことのある社名を印刷物の点数の多い順に並べると以下のとおりである。( ) 内は、設立年を示す。

G. Kolff & Co. (1859)

Ruygrok (1910)

Papyrus (前身 H. M. van Dorp & Co. 1853) (1910)

Albrecht & Co. (1892)

Indonesische Drukkerij (1914)<sup>11)</sup> 〈スンダ語名 Kantor tjitak Indonesische〉

そのほか、1冊でもスンダ語のものを扱った印刷所は以下のとおり。

N. V. Elect. Drukk. Favoriet (1915)

11) 京都大学東南アジア研究センター教授土屋健治氏の貴重な指摘に依るものである。土屋[1982: 159]を参照した。

Kantor tjitak Javasche Boekhandel & Drukkerij Batawi (1896)

Mercurius (1907)

J. B. Wolters' Uitgevers Maatschappij (?)  
Verwachting (1915)

Kwee Khe Soei (?)

この時期、1911年からバライ・プスタカが設立される前年の1916年までの同委員会が出版した本を見ると、ジャワ語の本が117点で最も多く、順にスンダ語68点、ムラユ語33点、マドゥラ語18点の、合計236点である。そのうちランスドゥルクレイにおいて印刷されたものが193点で、残りの43点が他の印刷所によるものである[Balai Pustaka 1948: 9]。そして印刷され出来上がったものは同委員会によって検査を受けた後、国立教材保管所('s Lands Depot van Leermiddelen)へ移され、そこで販売カタログが作られて教育省の名において販売された。しかしこのシステムは、同委員会へ持ち込まれる原稿の増加<sup>12)</sup>に連れて機能しなくなり徐々に全ての業務がバライ・プスタカへ移管され、1925年頃には同委員会は有名無実化してしまう。

バライ・プスタカは、1919年にムラユ語、ジャワ語、スンダ語の各「民衆教化委員会」シリーズを発行する頃から、非常に精力的に仕事を進め、1924年には移転したランスドゥルクレイの跡地に印刷所と倉庫を移し、印刷、出版の合理化を進めた。スンダ語の出版物の点数を図2で見ても、1920年代から30年代にかけてピークを迎えており、このバライ・プスタカの発展と一致する。また1929年

12) 1911年から1916年の間にこの委員会へ持ち込まれた原稿を言語別にみると、(1) ジャワ語 592点 (2) スンダ語 204点 (3) ムラユ語 96点 (4) マドゥラ語 47点 (5) バタック語 8点である。Balai Pustaka [1948: 10]を参照。



にはスンダ語の一般向けの週刊誌『パラヒアンガン』(*Parahiangan*) や子供向けの雑誌『タマン・ムランカリ』(*Taman Moerangkali*) を隔週で発行するようになる。

上にスンダ語の印刷物の官側の出版状況を見てきたが、次に民間の出版社によるものを見てみる。

ファン・デル・ハイス (J. A. Van der Chijs) による1659年から1870年の間の蘭領東インドの書誌目録にある印刷所および出版社のリストを見ると、バタヴィアには累計すると51の印刷所、出版社があったが、バンドゥンなどのスンダ地方には一つも見当たらない [Van der Chijs 1875]。もちろんスンダ語の本がスマラン (9社) やスラバヤ (16社) などの都市で印刷されなかったとは限らないが、可能性としては低い。先に述べたように、1945年頃までのバタヴィアの印刷所は、スンダ語の出版物に限って言うと御用印刷所の色合いが濃く、民間の独自の出版活動は主にバンドゥンなどのスンダ地方の都市で行われたのではなかったか。<sup>13)</sup> そこで『政府年鑑』(*Regerings-Almanak*)<sup>14)</sup> と『蘭領東インドにおける農園および商業事業のためのハンドブック』(*Handboek voor Cultuur- en Handelsondernemingen in Nederlandsch-Indië*)<sup>15)</sup> をもとに、いつスンダ地方の各都市

に最初の印刷所、出版社が出来たかをみると、まず1870年にバイテンゾルフ (*Buitenzorg*) に、1885年チレボンに (*Soendaneesche Almanak* を発行した A. Bisschop 社)、そして1897年バンドゥンに、1903年スカブミ (*Soekaboemi*) に見つけることができる。その後、それぞれの都市において1905年頃から印刷所、出版社の増加を見ることができるが、それらの全ての所が必ずしもスンダ語のものを扱っていたとは限らない。そこで、限られた KITLV の蔵書と上の資料を突き合わせて蘭領東インドに存在した民間の印刷所、出版社を調べると、以下のところでスンダ語のものを扱っていたことがわかる。( ) 内は、同じく設立年を示す。

〈バンドゥン〉

G. Kolff & Co., Bandoeng (1903)  
Toko Boekoe M. I. Prawira-Winata (?)  
N. V. Sie Dhian Ho (?)  
Insulinde (1917)  
Sindang Djaja (?)  
H. M. Affandi (1910)  
N. V. Boekh., Visser en Co. (1913)  
Dachlan-Bekti (?)  
Kaoem Moeda (?)  
Nanie, Taman Batjaan &  
Toko Boekoe (?)  
Nix & Co. (1911)

〈バイテンゾルフ〉

Labberton (?)

〈チレボン〉

Drukkerij Boerhan (?)

〈タシクマラヤ〉 (*Tasikmalaja*)

T. Pen (?)

〈スラバヤ〉 (*Soerabaja*)

F. Fuhri (1883)

上記のうち、バンドゥンの Dachlan-Bekti 社によって1930年に出版された本 [Joehana 1930] の表紙の出版広告は、そ

13) 稀なケースであるが、バンドゥンの Kaoem Moeda という印刷所ではバライ・プスタカの出版物を印刷している。

14) 1850年から1902年までのものを使った。1902年版までは出版社、印刷所、本屋が *handels-huizen* の項に都市別に掲載されているが、1903年以降は同項が削除されており使用できない。

15) このハンドブックも一年に一回発行されるもので、初年度版である1888年版から1940年版までを使った。出版社、印刷所は1914年までは、*Agent-schappen en voornaamste Handelsfirma's, alphabetisch geordend volgens de plaats-namen* の項、1915年以降は *Handels-Adreslijst van Nederl. Oost-Indië* の項に載っている。

のほかに57点のスダ語の本を出版していたことを窺わせる。その出版広告にある本は、ほとんどのものがどこの図書館にも保存されておらず、作者、発行年等が分からないため先に描いた図からも落ちている。このような既に失われてしまったスダ語の本がどのくらいの数に上るのか見当がつかないが、このような、とりわけ官主導のルートに乗らなかったものを常に念頭に置いておく必要がある。<sup>16)</sup> しかし、それらの埋もれてしまったものを考慮したとしても、やはりこの100年間のスダ語の出版活動において19世紀後半のランスドゥルクレイ、20世紀前半のバライ・プスタカが果たした役割は大きいものであった。

ここでスダ語の出版物について特にワワチャンを他の出版物と区別せず印刷所、出版社について見てきたが、ワワチャンだけがある特定の印刷所や出版社で扱われたり、ある特定の都市で出版されたというような形跡はなく、スダ語全般の出版状況と同様に考えてよいであろう。

## V 人気のあったタイトル

上にみてきた印刷物において、19世紀半ば以降の100年の間にどのタイトルが人気があったのか考えてみる。どの本がベスト・セラーであったのかというような記録がないため、一つの手段として本の販売カタログ<sup>17)</sup>を

用いどのタイトルの本がどのくらいの期間カタログに現れ、また何回版(刷)を重ねたかを調べることで推測を試みる。その中には何年間にもわたって品切れになっているにもかかわらず、注文すればまだ入手可能であることを示して「品切れ」(habis あるいは uitverkocht) と記され、カタログから落とされていないタイトルもある。これは少なくともその本の宣伝になっているわけであり、この場合もカタログに現れた期間として数えることとする。

また、入手できた資料のうち最も長期の分がある国立教材保管所とバライ・プスタカのものを主として用いているため、ここでも民間の出版社によって出版されたものが落ちている可能性を残している。<sup>18)</sup> さらに、1910年頃以降に初版が出版されたタイトルについてはカタログの制約からそれらがロング・ランを記録したのかどうか不明であるため、それらについては重ねた版の回数から人気があったかどうかを推測する。以下にタイトルを列挙する。

〈50年間以上カタログに現れたタイトル〉

*Wawatjan dongeng-dongeng toeladan*

『ワワチャン 模範とすべき物語』<sup>19)</sup> 初

版 1863年

ジャワ+ラテン文字 3版, ラテン文字

1版

*Dongeng-dongeng pieunteungeun*

(=*Spiegel der jeugd*)

16) たとえばケント大学のワトソン (C. Watson) に指摘を受けた Barnas [1930] の『ニャイ・ダシマ物語』が落ちている。このような植民地生まれの華人 (プラナカン peranakan) によって書かれたスダ語のものにも注意を払っていく必要がある。Ding [1978] で紹介されているマレーシアの国立大学図書館のコレクションは、この点で貴重である。

17) ここで使った本の販売カタログは14種類で、参考文献欄にまとめて示す。

18) 民間の出版社が独自に出版した最初のものは、Martanagara [1906] の可能性が高い。当時の出版事情を勘案すると、民間の出版物がリストから落ちたとしても1906年以降のものであろう。

19) スダ語の dongeng および tjarita の訳として共に「物語」を当てているが、dongeng はスダ古来のもの、tjarita は外来の物語という傾向がある。しかし、ともに物語性を持っており、詠まれるものであるため「物語」と訳した。

- 『人の鏡たる物語集』初版 1867年  
ジャワ文字 1版, ラテン文字 5版  
*Tjarita Abdoelrachman djeung Abdoelrachim* (アラビア語からの翻訳)  
『アブドゥルラフマン・アブドゥルラヒム物語』初版 1863年  
ジャワ・ラテン文字 3版, ラテン文字 4版  
*Wawatjan Ali Mochtar*  
『ワワチャン アリ・モフタール』初版 1864年  
ジャワ+ラテン文字 2版, ラテン文字 2版  
*Wawatjan Pandji Woeloeng*  
『ワワチャン パンジ・ウルン』初版 1871年  
ジャワ文字 3版, ラテン文字 5版,  
ジャワ語への翻訳版 1版  
*Tjaritana Ibrahim* (ワワチャン)  
『イブラヒム物語』初版 1853年  
ジャワ文字 1版, ラテン文字 1版  
*Wawatjan katrangan miara laoek tjai*  
『ワワチャン 淡水魚養殖の手引き』初版 1866年  
ジャワ文字 1版, ラテン文字 1版,  
特別装丁本 1版  
*Mitra noe tani* I-XV<sup>20)</sup>  
『農民の友』初版 1874年  
ジャワ文字 2版, ラテン文字 1版  
〈40年間以上〉  
*Tjarita Erman* (オランダ語からの翻訳)  
『エルマン物語』初版 1875年  
ジャワ文字 1版, ラテン文字 1版,  
特別装丁本 1版  
*Warna sari atawa roepa-roepa dongeng*  
I, II, III (ワワチャン, オランダ語からの翻訳)  
『特選物語集』初版 1876年  
I ジャワ文字 2版, ラテン文字 1版, 特別装丁本 1版  
II, III ラテン文字 2版  
*Babad Tanah Pasoendan* (W. van Gelder 著)  
『スンダの歴史』初版 1880年  
ジャワ文字 1版  
〈30年間以上〉  
*Tjarita Robinson Kroesoë* (オランダ語からの翻訳)  
『ロビンソン・クルーソー物語』初版 1879年  
ジャワ文字 1版, ラテン文字 1版,  
特別装丁本 1版  
*Mangle* (W. van Gelder 編集)  
『スンダ物語集』初版 1890年  
ラテン文字 9版  
*Tjarita toewan kapitan Bontekoe* (オランダ語からの翻訳)  
『ボンテク船長物語』初版 1873年  
ジャワ文字 4版, ラテン文字 1版  
上記のタイトルが当時人気のあったものと考えられるが、重要な要因である各タイトルの発行部数が不明であるため実際の本の売れ行きとややずれを生じている可能性も否めない。
- さて印刷物という新しいスタイル（普及形態）の出現は、それ以前の書写しによる文学の普及を伝統とし口承文芸の発達した社会にとって極めて新しいものであっただろう。新しさの一つは内容も書かれ方も全く同じであるというスタイル自体であり、それが読まれ方に変化をもたらし、それをパーソナルなものにしていった。そのことについては、定期刊行物の1910年以降の受容のされ方に生じた変化と同じものである。もう一つは、印刷さ

20) このタイトルは第I巻から順に年を追って刊行されたため、全ての巻が50年間以上カタログに載ったのではない。

れたものの内容にある。上記の14点のタイトルのうち、その半数が翻訳または翻案物であることは外の世界からやって来た文学作品や、実用的な新しい知識を伝える本が好まれて読まれたということである。そして、これら外からやって来た文学作品は伝統と結びついた韻文のワワチャンではなく、散文で書かれていることが多い。しかし、上記14点のうち6点がワワチャンであることを考えると、新しいスタイルの中で新しい内容のものが散文で書かれるという傾向があるにしても、19世紀のスンダ語の印刷物の出版の黎明期においてはワワチャンの文学フォームが大きな位置を占めていたと言える。

次に1910年頃以降に出版されたものを見ると、初版がすぐに売り切れ、版を重ねているものが良く売れ人気のあったものと推測できる。ここでは、各タイトルを挙げないが先の14種のカatalogで見ると、カatalogのある7年間以内に売り切れたものが16タイトルあり、その内ワワチャンが3タイトル含まれている。一方、この頃になると小説という新しい文学フォームで、翻訳物だけでなくスンダ人自身の手になる文学が書かれ始める。<sup>21)</sup> それらの小説は、伝統的なスンダ社会の中で現実と新しい価値観の狭間で悩む青年達を描いたものが多い。もちろんそのような内容の文学は、ワワチャンで書かれる事はなかったのだが、1930年以降になると極めて伝統的な題材を扱ったものでさえワワチャンではなく小説の文学フォームで書かれるようになる。<sup>22)</sup> 先述したように1920年頃まではワワチャンが一つの時代を代表する文学フォーム

であったのだが、ここに至ってそれは時代遅れのものとなったと言えよう。<sup>23)</sup>

#### IV 印刷されたスンダ文学をめぐる ——結びにかえて

以上、19世紀中頃からの100年間を代表する文学フォームとして位置付けられるワワチャンを軸にして資料整理を行なったが、最後にワワチャンを手掛かりにしてスンダ文学をめぐるいくつかの点について考察を行い、結びとしたい。

17世紀中頃にバタヴィアに初めて印刷物が現れ、先に見たように19世紀中頃には印刷技術がスンダ語の世界にも導入された。新しいスタイル（普及形態）と新しい内容をもったスンダ語の印刷物は、どのような人たちを書き手とし読者としていたのかをまず考える。

書き手は少なくとも19世紀においては、マレー語の文学において活躍したようなジャーナリストや植民地生まれの華人（プラナカン）、ユーラシアンという社会の周縁に住んでいた人々ではなく、スンダの伝統に根差した文化を体現していた世襲の貴族たちであった。彼等はスンダの核域とも言えるリンバンガン（Limangan）<sup>24)</sup>、バンドゥン（Bandung）などの現役の高級官吏達であり、例えば当代を代表する書き手のムハマッド・ムサ（Moehammad Moesa）<sup>25)</sup> はリンバンガンのイスラム教監督長（hoofd panghoeloe）で

21) スンダ語の最も初期の小説として、先の委員会の編集長を務めていたアルディウィナタ [Ardiwinata 1914] の『若者達には毒』を挙げることができる。

22) その最も明らかな例の一つが Sastrahadiprawira [1930] の『大佐閣下』である。

23) 全くワワチャンが書かれなくなったと言うのではなく、週刊誌『パラヒア・ガン』（1929～1940）の読み物欄では交替にワワチャンと小説とが連載されている。

24) 蘭領東インド時代の県（regentschap）の一つで、現在のガルット（Garut）県を中心に、それを一回り大きく広げた地域にほぼ相当する。

25) 詳しくは Sutia Sumarga [1983: 8-9], Norman [1888: 93-96], Salmun [1955: 435-438] を参照。

あった。彼等が現役の役人であったということは、それぞれの地方に居を構えて執筆活動を行い、それがオランダ人<sup>26)</sup>を通じて最も新しいものが集まるバタヴィアへと持ち込まれ印刷され、印刷されたものは再び大部分の読者の住むスンダの核域へ教育システムのルートを通じ、あるいは教育省の監督を受けたカタログを通じた注文販売によって新しいスタイルの読物として送り返された。

書き手たちは印刷物の表紙からおおよそ同定できるが、読者については地方に住んでいた書き手たちを取り巻く人々が主な読者であったであろうことが推測されるに留まる。それら以外の読者としては、バタヴィアやスンダ地方に住みスンダ語に関心を持っていた宣教師や役人等のオランダ人やユーラシアン、プラナカンが考えられる。さらに印刷される場であったバタヴィアに住むスンダ人たちもその読者であった可能性がある。なぜなら、1900年末のバタヴィアとメーステル・コルネリス (Meester Cornelis) の住民の人口が約10万人であり [松尾 1989]、その中にスンダ人の読者が皆無であったとは考えにくいからである。

しかしやがて、1910年頃以降になるとバタヴィアではその印刷が次第にランスドゥクレイからバライ・プスタカへ委譲され、スンダ地方→バタヴィア (ウェルテフレーデン Weltevreden)→スンダ地方のルートはメイン・ルートとして残るものの、バンドゥン等のローカルの出版社の出現と共に別のルート、即ち現地で書かれ、印刷され、売られるルートが生まれた。それと共に書き手と読者も変化したと考えられる。これまで世襲制を

基に成り立っていた貴族社会は、教育の発達と貨幣経済の広がりと共に新しく称号を得た新興の貴族たちの参入によって変容した。そのような新興貴族たちに加えて、印刷された教科書や文学を読んで育った新しい世代のスンダ人たちもまた書き手や読者として参入していった。こうした社会の変容に根ざした書き手と読者の増加が1920年代以降の本や定期刊行物の出版のピークを招来したと考えられる。

ところで、初期の出版物がスンダ語 (人) の教育の向上を目指す性格を持っていたことは、その使われている文字にも反映されている。ラテン文字教育の普及のため、<sup>27)</sup> 19世紀の出版物では、見開きで右側にジャワ文字、左側にラテン文字の読物が多く見られる。あるいは、初版本ではジャワ文字を使い、2版目からはラテン文字になっているものがある。しかし20世紀になるとジャワ文字のものはほとんど姿を消してしまい、そこにオランダ植民地政庁の教育方針のもとでのラテン文字教育の発達を見ることができる。

ここで注意したいのは、ペゴン文字 (アラビア文字) では19世紀には1点も印刷された出版物がないことである。<sup>28)</sup> 同時代のマニュスクリプトを見ると、ジャワ文字とペゴン文字の使用頻度はほぼ同じであるにもかかわらず、ペゴン文字ではスンダ語は印刷されなかった。それは書き手たちが、政治と文化の中心であったカブパテン周辺の貴族たちであったため、よりジャワ文字に精通しており<sup>29)</sup> 彼等の助言によってオランダ植民地政庁

26) ムハマッド・ムサはスンダ地域の原住民教育に熱心であったオランダ人ホーレ (K. F. Holle) と20年間以上にもわたって親交を深めており、ホーレがムサの原稿のランスドゥクレイへの橋渡しをしていたようである。

27) Ardiwinata [1916] の『スンダ語のオランダ文字による書き方』という本のタイトルにその教育方針がよく現れている。

28) 19世紀の本の販売カタログのマレー語の項ではアラビア文字で多くの本の紹介がなされており、技術的にはその印刷は可能であった。

29) ジャワのマタラム王国の支配下においてジャワ語が公用語とされた伝統が19世紀に至ってもまだ残っていた。

がジャワ文字での印刷という方針を決めたのではなかったか。しかるに、もう一つの文化の中心地であった寄宿塾パサントレン (pasantren) 周辺では、むしろペゴン文字がより卓越しており、また農村部の住民もジャワ文字よりコーランを通じてペゴン文字に慣れていた。印刷物においてジャワ文字のみが使用されたことは、読者として書き手たちの周辺に住む町の人々や、貴族たちに的を絞ったものであったと考えられ、また現実的に本を買う経済力を勘案してみてもパサントレン周辺の農村部の人々に読み手として照準を当てることは不適当であった。

教育のメディアとして出版された本において使われるスンダ語は、正しいスンダ語であらねばならなかった。そのスンダ語は伝統を担っていた貴族たちによって書かれる多くのクリシュを用いた、マニユスクリプトにおいて慣れ親しまれ書き写されてきた、そういうスンダ語であった。先に挙げたムハマッド・ムサのワワチャンの代表作である『パンジ・ウルン』(*Pandji Woeloeng*) を読むと、19世紀に書き写されていたと考えられるマニユスクリプトを読むのとほとんど変わらない印象を持つ。ところが、1890年を過ぎて書かれた、人気のあった読み物の一つ『ワワチャン・プルナマ・アラム』(*Wawatjan Purnama Alam*) を読むと、スンダ語がより口語的になり、マニユスクリプトのものとは異なるものになっていることに気付くのである。

少し大胆にいうと、19世紀の半ばから印刷されたスンダ語は、貴族たちの手によって教科書化され、あるいは、正当なスンダ語が定められランスドゥルクレイによって印刷された読物の中で育てられた。そして世紀が代わり、各種のスンダ語の文法書がオランダ人とスンダ人自身によって出版される頃、スンダ語のスタンダードが出来上がり、それをもってその後の出版物のピークに入ってしまった。

マレー語の文学が「野放し」(liar) の文学をバライ・プスタカの設立以前に多く生み出したことと比較すると、スンダ語の文学はもっぱら官製のものであり、「良く飼い馴らされた」(jinak) ものしか生み出さなかったと言える。それはスンダ語の印刷、出版の制度と環境、またスンダ語が持っている敬語体系およびそれによって維持される封建社会に原因を求めることができよう。

文学フォームについて、定型詩プブだけでなくより古い伝統を持つパントゥン等の韻文やより点数の多い散文を同様に印刷物の中で考えてみることに、あるいはワワチャンとの比較において考えてみることに重要であり、それを元にしてさらにスンダ文学について考察を深めなければならない。本稿はワワチャンという一つの文学フォームを軸にしてスンダ文学への最初の接近を試みたものである。

#### 参 考 文 献

- 〈本の販売カタログ〉(発行年順)  
 Cohen Stuart, A. B.; & de Gaay Fortman, P. L. 1877. *Catalogue des Bibliothèques Importantes, vente: 30 Avril—5 Mai 1877*. Leide: E. J. Brill.  
*Daftar Goedang kitab Goebnemen di Batawi Djilid I*. 1881 (Tahun 1882); 1882 (Tahun 1883). Batavia: Lands-drukkerij.  
*Catalogus van Leer-en Leesboeken en andere Leermiddelen ten behoeve van het Inlandsch Onderwijs*. 1882; 1884. Batawi: Pertjitakan Goewernement.  
*Catalogus van Boeken in en over Inlandsche Talen verkrijgbaar ter Landsdrukkerij te Batavia*. 1883. Batawi: Goewernement.  
*Catalogus van Boeken, Kaarten, Atlassen en andere Drukwerken in voorraad bij 's Lands Depot van Leermiddelen te Batavia*. 1888. Batavia: Landsdrukkerij.  
*Catalogus van hetgeen verkrijgbaar is bij 's Lands Depot van Leermiddelen te Weltevreden op voor Gouvernements Inlandsche*

- Scholen Aangevraagd kan worden ter verstreking van Batavia.* 1890. Batavia: Lands-drukkerij.
- Catalogus der Boeken enz. verkrijgbaar bij het Depot van Leermiddelen te Weltevreden voor 1898, Afdeling I.* 1897. Batavia: Landsdrukkerij; 1901-1912, 1914-1915. Batavia: G. Kolff & Co.; 1929. Batavia: Lands-drukkerij.
- Daftar Besar dari Toko Boekoe dan Kantor tjitak Albrecht & Co.* 1898. Batavia: Albrecht & Co.
- Catalogue de Livres Anciens et Modernes aux Prix Marquès No. 68 Ile partie.* [1905]. Leide: E. J. Brill.
- Daftar Boekoe-boekoe jang dikeloearkan atas oesaha Commissie voor de Volkslectuur.* 1915. Batavi: Ruygrok & Co.; 1917. (Daftar jang kedoea); 1918. (Daftar jang ketiga) Batavia: Kho Tjeng Bie & Co.
- Daftar kitab-kitab jang dikeloewarkan ol eh Komisi Balai-Poestaka.* 1919. (Daftar jang keempat); 1921 (Daftar jang kelima); 1922 (Daftar jang keenam). Batavia: G. Kolff & Co.
- Daptar Boekoe-boekoe Soenda kaloearan Bale Poestaka.* [1923] (Daptar noe katoedjoeh) Weltevreden: Bale Poestaka.
- Daptar Alit Boekoe-boekoe Basa Soenda kaloearan Bale Poestaka.* 1928. Weltevreden: Bale Poestaka.
- Ockeloen, G. [1939]. *Catalogus dari Boekoe-boekoe dan Madjallah-madjallah jang diterbitkan di Hindia Belanda dari tahoen 1870-1927.* Batavia-Amsterdam: G. Kolff & Co.
- 〈定期刊行物〉
- Handboek voor Cultuur- en Handelondernemingen in Nederladsch-Indië.* 1888-1940. Amsterdam: J. H. De Bussy.
- Parahiangan.* (mingguan) 1929-1940. Weltevreden: Bale Poestaka.
- Poesaka Soenda* (bulanan) 1922-1929. Weltevreden: Pagoejoeban Java-Instituut.
- Regerings-Almanak voor Nederlandsch-Indië.* 1850-1902. Batavia: Landsdrukkerij.
- Soendaneesche Almanak.* 1882-1897. Cheribon: A. Bisschop.; 1898-1903. Samarang: G. C. T. van Dorp & Co.
- Soendaneesche Volksalmanak.* 1919-1940. Weltevreden: Bale Poestaka; Landsdrukkerij.

## 引用文献

- Anonymous. 1853. *Tjaritana Ibrahim.* Batavia: Landsdrukkerij.
- \_\_\_\_\_. [1859]. *Ijeu wawatjan tjarita Ibrahim.* Batavia: Landsdrukkerij.
- Ardiwinata, D. K. 1914. *Baroeang ka noe ngarora.* Weltevreden: G. Kolff & Co.
- \_\_\_\_\_. 1916. *Palanggeran noeliskeun basa Soenda koe aksara Walanda.* tjitakan ka -2. Batavia: Bale Poestaka.
- Balai Pustaka. 1948. *Balai Pustaka, sewadjarnya 1908-1942.* Djakarta.
- Barnas, E. M. [1930]. *Tjarios Njai Dasima.* Batavia: Kwee Khe Soei.
- Departement van Gouvernementsbedrijven in Nederlandsch-Indië. 1912. *Landsdrukkerij verslag over 1911.*; 1913 ~ 1934. (over 1912 ~ 1933). Batavia: Landsdrukkerij.
- Ding, Chao Ming. 1978. An Introduction to the Indonesian Peranakan Literature in the Library of University Kebangsaan, Malaysia. *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* 51 (1).
- Ekadjati, Edi S., ed. 1988. *Naskah Sunda.* Bandung: Kerja sama Lembaga Penelitian Universitas Padjadjaran dengan The Toyota Foundation.
- Ekadjati, Edi S.; & Hardjasaputra, A. Sobana. 1987. *Bibliografi Jawa Barat.* Kerja sama Universitas Padjadjaran dengan KITLV program studi Indonesia.
- Joehana. 1930. *Lalampahan Pangeran Nampabaja sareng Pangeran Lirbaja.* Bandung: Dachlan-Bekti.
- Juynboll, H. H. 1899. *Catalogus van de Maleische en Soendaneesche Handschriften der Leidsche Universiteits-Bibliotheek.* Leiden: E. J. Brill.
- \_\_\_\_\_. 1912. *Supplement op den catalogus van den Soendaneesche Handschriften der Leidsche Universiteits Bibliotheek.* Leiden: E. J. Brill.

- Kern, R. A. 1983. *Catalogus van de verzameling Soendase handschriften van Snouck Hurgronje in de Leidse Universiteits Bibliotheek*. (Cod. Or. 8923): geredigeerd en ingeleid door J. Noorduyn. Leiden. (Mimeographed)
- Martanagara, Adipati Aria. 1906. *Wawatjan Angling Darma*. Bandung: H. M. Affandi.
- 松尾 大. 1989. 「スタンブル劇ノート」東南アジア史学会レジュメ. 大阪. (謄写版刷)
- 森山幹弘. 1987. 「Tjarios wiwitan radja-radja di poelo Djawa, スンダ (王朝史)」. 大阪外国語大学大学院修士論文.
- Norman, M. D. Levysohn. 1888. Ter Herinnering. *Eigen Haard* 8. Haarlem.
- Ricklefs, M. C.; & Voorhoeve, P. 1977. *Indonesian Manuscripts in Great Britain: A Catalogue of Manuscripts in Indonesian Languages in British Public Collections*. London: Oxford University Press.
- Rouffaer, G. P.; & Muller, W. C. 1908. *Catalogus der Koloniale Bibliotheek van het Kon. Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde van Ned. Indië en het Indisch Genootschap*. ; 1915 (eerste supplement); 1927 (2 de supplement); 1937 (3 de supplement); 1966 (4 de supplement); 1972 (5 de supplement). 's-Gravenhage : Martinus Nijhoff.
- Salmun, M. A. 1955. Raden Hadji Muhammad Musa. *Buku Kita* Th. Ke-1. No.10. Djakarta.
- Sastrahadiprawira, R. Memed. 1930. *Pangeran Kolonel*. Weltevreden: Bale Poestaka.
- Satjadibrata, R. 1931. *Rasiah Tembang Soenda*. Batavia: Balai Poestaka.
- Soeriadiredja, R. 1913-1925. *Wawatjan Poernama Alam*. djilid I-VI. Batawi: Balai Poestaka.
- Sutia Sumarga, Rusman. 1983. Tutungkusan, Muhammad Musa. *Mangle* 889. Bandung.
- 土屋健治. 1982. 『インドネシア民族主義研究』東京: 創文社.
- Van der Chijs, Mr. J. A. 1875. Proeve eener Ned. Indische Bibliographie (1659-1870). VBG 37. Batavia: Bruining & Wijt.
- van Zanten, Wim. 1987. *Tembang Sunda, An Ethnomusicological Study of the Cianjuran, Music in West Jawa*. Leiden: Instituut voor Culturele Antropologie en Sociologi eder Niet-Westerse Volken.